

水辺住宅地の居住者が認知する水域について

A Study for Cognitive Space of the Water Area

桜井 慎一*, 横内 憲久**, 富岡 量秀***

By Shin-ichi SAKURAI, Norihisa YOKOUCHI and Ryōshū TOMIOKA

The purpose of this study is to understand the extent of the water area which inhabitants recognized through the interview survey. We think the cognitive area of the water is different in the scale and form of water. Therefore, in order to find water areas where inhabitants recognized, in this paper selected three residential areas located in front of different type of water. Major results are following. (1) Water area is not equally recognized by inhabitants. (2) The smaller scale of water area, the more inhabitants recognized same area. (3) Inhabitants' cognitive area of water is affected by daily use of waterfront. (4) Desirable landscape can induce inhabitants' cognition to water area.

1. 研究目的

都市生活者の水環境に対する認識の萌芽などを背景として、敷地をウォーターフロントに求めたり、調整池の機能を持たせた人造湖を敷地の中に設けるなど、水域が有する良好なアメニティを住環境形成の一助として活用するような住宅開発が各地で行われている。水辺住宅地に居住する住民は、例えば、通勤・通学や買物の際に水辺の道を通ったり、レクリエーションや気分転換を図るための散歩・散策で水辺へ訪れたり、自宅のベランダや窓越しに水域を眺望したり、波音を聞き潮の香を感じたり等々、日常生活の中のさまざまな場面で水とかかわりながら、個々人の意識下に当該水域が位置づけられていくようになる。その結果、住民は水域に対して愛着や

誇りを持つようになり、さらには、水が人と人を結びつける媒体として機能するようなコミュニティの形成が図られると考える¹⁾²⁾。したがって、水辺の住宅開発において、水をコミュニティの中核として位置づけるためには、住民の水域に対する意識を把握することが重要となる。

水域のあり方を論じた先行研究としては、主に景観論に基づいたものが多く、例えば、次のような文献を挙げることができる。篠原・樋口³⁾は、港湾を対象とした実測調査等によって人間の視覚構造より俯角が $-8^{\circ} \sim -10^{\circ}$ の水面が最も見やすい範囲であることを述べている。松浦・島谷⁴⁾は、橋梁上から撮影した写真に対する評価結果より、見通し距離が100m以上かつ河川幅が20~30m以上の水面が適度であるとしている。島谷ら⁵⁾は、現地における被験者実験等より、視野に占める水面面積と対岸の水際から堤防の天端までの面積の比が2.0以上であれば水面の見えが適度であることを説いている。また、

* 正会員 工博 日本大学理工学部助手 海洋建築工学科

** 正会員 工博 日本大学理工学部助教授 海洋建築工学科

*** 日本大学大学院 海洋建築工学専攻

(〒274 千葉県船橋市習志野台 7-24-1)

斎藤⁹⁾は、港湾や漁港の事例調査より、湾入型の水域の場合、人々が親しみやすいヒューマンスケールを創出する目安として、一边がほぼ500mの正方形に収まっていることを論じている。栗田ら⁷⁾は、特定の条件のもとでは、大きな水面を1つ作ろうと、小さな水面をあちこちに作ろうと、全体での水の見える範囲は一定であることを明らかにしている。

これらの既往研究によって景観対象としての水域の特性に対する知見が得られているが、本研究では、水辺住宅地の居住者が日常生活を通じて、当該水域をどのように認知しているのかを現地調査によって把握し、その根拠となる要因について考究することを目的としている。

2. 研究方法

(1) 調査方法の検討

空間認知に関する研究で適用される多岐にわたる解析手法の種類とそれらの有効性については、例えば北村⁸⁾が網羅的に整理しているが、本研究では、住民の認知する水域を面的に把握するという目的を達成するための方法として、圏域図示法を採用した。これは、対象地域の地図を提示し、地図上に被験者(住民)に特定(身近に感じる水域)の範囲を記入させる方法である。この手法については、土肥⁹⁾によっても利点が述べられており、また、筆者らの既往研究¹⁰⁾によっても有効性が確認されている。

(2) 調査地区の選定

住民の水域の捉え方は、対象となる水域の種類(海、河川、湖沼等)や規模・形態によっても異なってくると考えられる。そこで本稿では、これら水域のタイプの異なる次の3ヵ所の水辺住宅地をケーススタディとして取り上げ研究を展開する。

①京浜運河という幅約150mの線的な水域に沿って立地する東京都品川区の「八潮パークタウン」(以下、『八潮』と記す。写真-1、図-1参照)

②かつての漁港であり、現在「舟溜り」と称される面積約3.2haの小規模な水域を敷地の中に取り込んでいる横浜市金沢区の「金沢シーサイドタウン」(以下、『金沢』と記す。写真-2、図-2参照)

③東京湾の広大な水域が住宅の前面に広がっている横須賀市の「浦賀かもめ団地」(以下、『浦



写真-1 八潮パークタウンから見た京浜運河



写真-2 金沢シーサイドタウンの舟溜り



写真-3 浦賀かもめ団地から見た東京湾

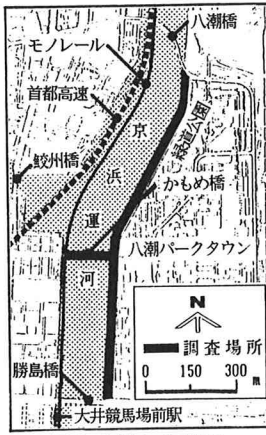


図-1 八潮パークタウン



図-2 金沢シーサイドタウン

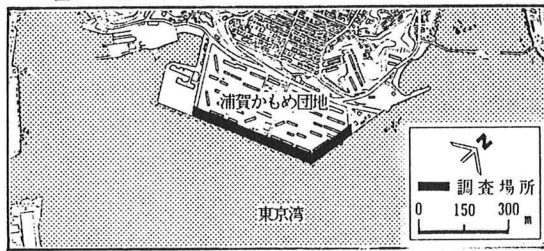


図-3 浦賀かもめ団地

表-1 調査対象地区の概要

対象地域	八潮パークタウン	金沢シーサイドタウン	浦賀かもめ団地
入居開始年 [年]	1983	1978	1970
敷地面積 [ha]	40.87	163	12.51
世帯数 [世帯]	5,478	7,538	1,689
人口 [人]	17,032	26,724	約5,050

注) 世帯数および人口は、八潮が1989年8月1日現在、金沢が1988年7月1日現在である。浦賀の世帯数は総戸数、人口は県へのヒアリング結果(1世帯あたり3人程度)に基づく推計値を示す。

賀』と記す。写真-3、図-3参照)

なお、3地区の概要は表-1に示す通りである。

(3) 被験者および調査形式

被験者は当該住宅地に居住する住民のうち、図-1～3に示す水辺の調査地点を訪れた中学生以上の個人を対象とし、調査員による直接面接形式で実施した。これは、被験者に水域を視認させ、回答の確度を高めることを意図したからである。

(4) 事前調査の内容と問題点

調査の可能性と妥当性を確認する意味から、本調査に先立ち、1989年8月29日と30日の2日間、『八潮』を対象に33人の住民を被験者とした事前調査を実施した。主な検討課題は、教示文の与え方の適否と、陸と異なって目印のない水域を地図上に範囲づけることが可能か否かということである。

本研究では、前述したように、日常生活全般を通じて住民の意識下に根づいている水域を捉えることが目的であることから、例えば「好きな」といった好悪の評価になったり、「きれいな」など特定の五感(主に視覚)に依存するような表現は避け、「身近に感じる」という言葉に置き換えて、教示文を「あなたがこの水域で身近に感じる範囲を囲んで下さい」と設定した。ここで、「水域」という箇所が被験者に理解できない場合があったため、本調査では「この運河」「この舟溜り」「目の前に広がっている東京湾」などと、3地区の具体的な水域の名称に言換えて指示することとした。また、被験者が地図上に水域を範囲づけられるかという調査手法自体の適否は、『八潮』の場合、ほとんどの被験者が調査員の誘導なく指示どおりに実行したことと、範囲づけた結果(水域の領域)に一致性がみられたことから、これを有効と判断して本調査を行った。

(5) 本調査の概要

事前調査の結果を踏まえ、以下の内容に従って本調査を実施した。

a) 調査期間およびサンプル数

3地区それぞれのサンプル数が、標本数として最低限必要とされる100票¹⁾となることを目標に調査を行った。したがって、被験者の選定は水辺を来訪した住民の中から無作為に抽出してはいるが、統計学的に有効な母集団(全住民)からのランダムサンプリングとはなっていない。結果的に、3地区の調

査期間およびサンプル数は、『八潮』が1989年9月8日(金)から11日(月)までの4日間で105票、『金沢』が同年10月13日(金)から16日(月)までの4日間で105票、『浦賀』が同年10月20日(金)から10月22日(日)までの3日間で100票が得られた。なお、3地区とも調査時間は午前11時から午後5時までの6時間、調査員は3名の学生である。

b) 調査用具等

被験者に範囲の記入を依頼する地図は、地図上の情報のみに頼って回答することを避けるため、地図記号や施設名称などを一切消した縮尺5千分の1の白図を用いた。また、調査員による誤差を極力少なくするため質問順序、教示文、注意点等を記載した調査マニュアルを作成した。

c) 範囲の確認のしかた

調査にあたっては、地図の見方や住宅地のおおよその骨格を説明することも兼ねて、まず最初に調査員が、被験者がいる(調査を実施している)地点と、水際線、橋など特徴的な施設の位置を実景と見比べながら地図上に示した。前述した教示文に対して、「身近」の意味等を聞き返してくる場合、「あなたが思うとおりで良い」としか答えないこととした。

また、本研究では、身近に感じる水域を面的に捉えたいため、被験者が地図上に示した線が閉じている場合(図-4のa参照)は、それでよしとする。しかし、線が閉じていなかったり、扇形に範囲を示す場合(図-4のb参照)は、どこまでを含めるのかを確認した。水際線に沿って線的に示したり、所々を点的に示す場合(図-4のc参照)は、その周辺は含めないのか否かを確認した。なお、「対岸の方向」、「全体」などと観念的な言葉のみで回答し、地図上に具体的範囲を示さなかった場合は無効とした。

d) その他の調査内容

被験者が身近に感じる水域として示した範囲の確かさ(回答の有効性)を確認し、また、範囲づけの根拠となる要素を得る目的から、以下の項目を併せて調査した。なお、回答形式は、場所については被験者自らによる白地図への記入、他の質問項目については自由回答式とした。

①身近に感じる理由: 身近に感じる水域を範囲づけた直後に、「なぜここを身近に感じるのか」と問い、その理由をたずねた。

②水辺の利用目的と頻度：調査時点での利用目的を聞いた後、その他で日常的に水辺を利用する目的の種類を問い、最後にその中で最も頻繁に利用する目的およびその頻度をたずねた。

③被験者の居住地：白地図上に被験者の居住地を記入させた。

④水辺で利用する場所・理由・気分・要素：日常的にさまざまな目的で利用する場所を、前述した身近に感じる水域と同じ方法で白地図上に記入させた。さらにその中で最も頻繁に利用する場所を同様に記入させるとともに、併せてその理由、その時に感じる気分、その気分を感じる要素についてもたずねた。

⑤水辺で利用しない場所・理由・気分・要素：③と同様な方法でたずねた。

⑥好ましい景観の場所・要素：好ましいと感じる景観の場所を記入させ、そう感じさせる要素が何であるかを問うた。

⑦自宅から水域への可視性・見える範囲：自宅から水域が見えるか否かを問い、見える場合はその範囲を白地図に記入させた。

⑧被験者の属性：性別、年齢、職業、居住年数および住戸の所有形態を聞いている。

質問の順序としては、被験者になるべく回答しやすいように、事実として答えられる項目から始めるとともに、水域にかかわるいくつかの行為・評価を一通りたずねることによって水域に対する認識を高めた後、身近に感じる水域の範囲を記入させている。なお、本稿では、これらの調査項目のうち、①④⑥⑧を中心に述べる。

(6) 被験者が示した領域のデータ化の方法

被験者が白地図に描いた水域の範囲は、面的に示された回答と線的・点的な回答とがあるため、データ集計や地域比較の都合上、両者をメッシュデータに置き換えて解析を進めることとした。具体的には対象地域を25mメッシュで分割し、メッシュごとにデータ集計を行うものとする。被験者から得た回答をメッシュデータへ変換するに際しては、次の原則に従った。①範囲を示した線が閉じている場合は、線上も含めて囲まれたすべてのメッシュにデータを入れる(図-4のa)。②扇形に示したり線が閉じていない場合、範囲の確認時に回答のあった通りのメッシュすべてにデータを入れる(図-4のb)。また、③

線のあるいは点的な回答の場合は、線上、点上のメッシュにデータを入れる(図-4のc)。

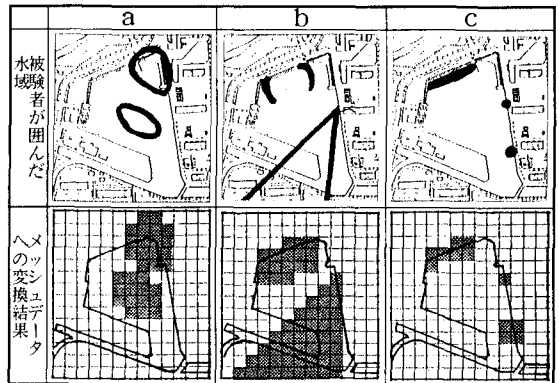


図-4 メッシュデータへの変換事例

3. 結果および考察

(1) 被験者の属性

被験者の属性は、表-2に示す通りであり、性別では『浦賀』で男性が65.0%と高く、年齢は3地区とも30～60歳、職業は会社員と専業主婦が多い。居住年数は、3地区それぞれの入居開始年(表-1)から住んでいる人が多く、『八潮』が7年程度、『金沢』が10年程度、『浦賀』が20年程度となっている。また、住戸の所有形態は、『八潮』が持家と賃貸がほぼ半数ずつ、『金沢』では持家が約8割、『浦賀』はすべて賃貸である。

表-2 被験者の属性 [単位:人, (%)]

対象地域	八潮 パークタウン	金沢 シーサイドタウン	浦賀 かもめ団地
有効回答数	105 (100.0)	105 (100.0)	100 (100.0)
性別			
男性	50 (47.6)	43 (41.0)	65 (65.0)
女性	55 (52.4)	62 (59.0)	35 (35.0)
年齢			
10歳代	10 (9.5)	9 (8.6)	6 (6.0)
20歳代	12 (11.4)	7 (6.7)	7 (7.0)
30歳代	30 (28.6)	28 (26.7)	20 (20.0)
40歳代	35 (33.3)	32 (30.4)	29 (29.0)
50歳代	13 (12.4)	18 (17.1)	29 (29.0)
60歳以上	5 (4.8)	11 (10.5)	9 (9.0)
職業			
会社員	43 (41.0)	41 (39.0)	53 (53.0)
専門職	4 (3.8)	6 (5.7)	5 (5.0)
自営業	8 (7.6)	3 (2.9)	6 (6.0)
専業主婦	27 (25.7)	42 (40.0)	22 (22.0)
学生	16 (15.2)	12 (11.4)	5 (5.0)
無職	2 (1.9)	1 (1.0)	9 (9.0)
その他	5 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
居住年数			
2年未満	4 (3.8)	6 (5.7)	7 (7.0)
2～4年未満	13 (12.4)	7 (6.7)	5 (5.0)
4～6年未満	37 (35.2)	19 (18.1)	8 (8.0)
6～8年未満	47 (44.8)	19 (18.1)	7 (7.0)
8～10年未満	0 (0.0)	29 (27.6)	1 (1.0)
10～12年未満	0 (0.0)	21 (20.0)	12 (12.0)
12～14年未満	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (4.0)
14～16年未満	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (12.0)
16～18年未満	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (9.0)
18～20年未満	0 (0.0)	0 (0.0)	23 (23.0)
20年以上	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (12.0)
無回答	4 (3.8)	4 (3.8)	0 (0.0)
所有形態			
持家	54 (51.4)	81 (77.1)	0 (0.0)
賃貸	50 (47.6)	21 (20.0)	100 (100.0)
社宅・寮	0 (0.0)	2 (1.9)	0 (0.0)
その他	1 (1.0)	1 (1.0)	0 (0.0)

(2) 住民が認知する水域

図-5～7は、被験者が当該メッシュを身近に感じる水域として指摘した回答数(指摘数)の有効回答数に対する割合(指摘率)を、各メッシュの中央を結び等高線状に表したものである。

『八潮』(図-5)では、指摘率10%以上の場所は敷地に面する京浜運河のほぼ全域と勝島橋を越えて大井ふ頭中央海浜公園まで延びており、20%以上になると、北は八潮橋とかもめ橋の間から南は勝島橋までとなる。30%以上ではかもめ橋を中心としたやや北側寄りに狭まり、40%以上になると、かもめ橋の敷地寄りの小さな範囲に収束している。

『金沢』(図-6)では、舟溜り全域が10%以上の指摘率を示しており、20%以上になるとほぼ北側半分の水域となる。30%以上の場所は、40%以上の範囲より若干広い程度であり、階段護岸となっている水域の北角周辺に表れている。

『浦賀』(図-7)で指摘率が10%以上の水域は、対岸の房総半島に向けた広い範囲となっている。20%以上の場所は、敷地前面の水域と通称「首切り場」と呼ばれている灯明崎周辺の2ヵ所に分れる。30%以上になると、敷地に近接した狭い範囲となり、40%以上の高い指摘率の場所はなかった。

これらの結果より、住民は当該水域全体を一律に認知しているのではなく、共通して意識の強い場所があることが把握できる。

(3) 認知する水域の広さの比較

表-3は、身近に感じる水域の指摘率が10%以上のメッシュ数を10%きざみで集計し、その合計(10%以上の総メッシュ数)に対する割合を求めたものである。これをみると30%以上(「40%以上」と「30～40%未満」の合計)の割合は、『金沢』23.6%、『八潮』8.1%、『浦賀』1.7%となっており、水域の規模が小さいほど住民が認知する水域の一致性が高くなる傾向を示すものと解釈できよう。

(4) 身近に感じる水域の理由

3地区それぞれについて、身近に感じる水域を指摘した理由を回答数の多い順に並べて示したのが表-4である。『八潮』は、毎日水辺をよく通るなどといった「利用するから」が45.5%と最も多く、次いで、家や公園からすぐに水域が目に入るなどといった「よく見るから」(33.7%)、水がきれい触れら

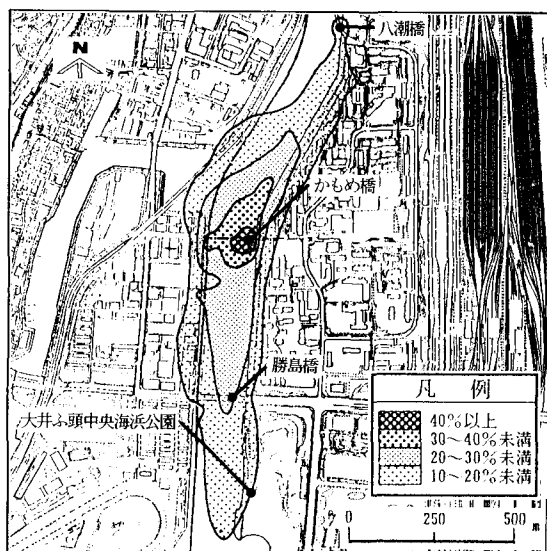


図-5 『八潮』の住民が身近に感じる水域

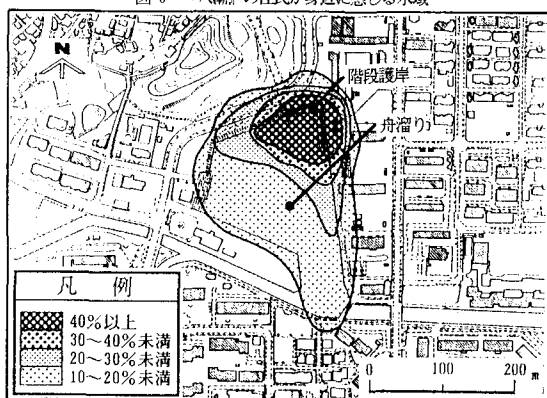


図-6 『金沢』の住民が身近に感じる水域

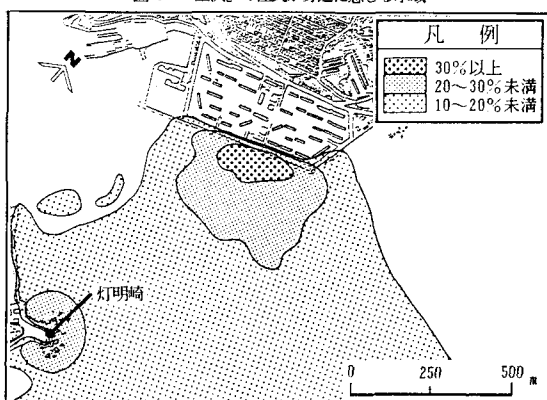


図-7 『浦賀』の住民が身近に感じる水域

表-3 指摘率別メッシュ数 [単位:メッシュ数,(%)]

指摘率	対象地域	八潮 パークタウン	金沢 シーサイドタウン	浦賀 かもめ団地
40%以上		8 (1.7)	14 (16.5)	0 (0.0)
30～40%未満		31 (6.4)	6 (7.1)	29 (1.7)
20～30%未満		147 (30.3)	12 (14.1)	208 (12.6)
10～20%未満		299 (61.6)	53 (62.3)	1,420 (85.7)
合 計		485 (100.0)	85 (100.0)	1,657 (100.0)

れるなどといった「水辺の状況が良い」(24.8%)となっている。『金沢』でも、同じく「利用するから」(37.1%)および「水辺の状況が良い」(31.5%)の回答が多い。『浦賀』は、「よく見るから」(26.8%)が最も多く、次いで「水辺の状況が良い」が23.9%、「景色が良いから」と「近いから」がともに18.3%で続いている。これらより、住民は日常的に利用したり良好な景観を形成しているような水域を身近なものとして認知しているのではないかと考えられる。

そこで以下においては、水域の認知に深くかわる水辺の利用および景観の2つを取り上げて考察を進めるものとする。

表-4 身近に感じる水域を指摘した理由 [単位:人, (%)]

八潮パークタウン	金沢シーサイドタウン	浦賀かもめ川地
利用するから 46 (45.5)	利用するから 33 (37.1)	よく見るから 18 (26.8)
よく見るから 34 (33.7)	水辺の状況が良い 28 (31.5)	水辺の状況が良い 17 (23.9)
水辺の状況が良い 25 (24.8)	馴染みがあるから 12 (13.5)	景色が良いから 13 (18.3)
近いから 17 (16.8)	整備されている 12 (13.5)	近いから 13 (18.3)
景色が良いから 10 (9.8)	近いから 7 (7.9)	利用するから 11 (15.5)
馴染みがあるから 7 (6.9)	生物がいるから 7 (7.9)	馴染みがあるから 5 (7.0)
人があるから 5 (5.0)	景色が良いから 6 (6.7)	生物がいるから 4 (5.6)
緑があるから 4 (4.0)	よく見るから 6 (6.7)	開放的・解放的 2 (2.8)
整備されている 4 (4.0)	緑があるから 4 (4.5)	緑があるから 1 (1.4)
生物がいるから 3 (3.0)	人があるから 2 (2.2)	整備されている 1 (1.4)
開放的・解放的 2 (2.0)	開放的・解放的 1 (1.1)	自然があるから 1 (1.4)
自然があるから 0 (0.0)	自然があるから 1 (1.1)	人があるから 0 (0.0)
その他 1 (1.0)	その他 1 (1.1)	その他 1 (1.4)
特になし 2 (2.0)	特になし 3 (3.4)	特になし 1 (1.4)
有効回答者数 101 (100.0)	有効回答者数 89 (100.0)	有効回答者数 71 (100.0)

(5) 認知する水域と利用する水辺との関係

図-8～10は、被験者が最も頻繁に利用する水辺として範囲づけた指摘率分布を表したものであり、その理由を回答数の多い順に示したのが表-5である。

『八潮』(図-8)で指摘率30%以上と高い値を示す場所は、かもめ橋付近および勝島橋との中間あたりにあり、40%以上になるとかもめ橋の敷地寄りの狭い範囲となっている。利用する理由(表-5)をみると、「近いから」(34.1%)、「通過のため」(28.0%)、「余暇利用」(19.5%)の回答が高いが、かもめ橋や勝島橋に至る緑道公園は運河の対岸に位置する東京モノレールの大井競馬場前駅へ行くための通路として機能している場所である。

『金沢』(図-9)では、水域の北角に位置する階段護岸付近の指摘率が40%以上と高く、そこを中心として南側の護岸と西側の砂浜に沿って20%以上の分布が延びている。指摘した理由(表-5)は、「通過のため」と「余暇利用」がともに37.1%と最も高く、次いで「買物のため」(25.8%)となっている。階段護岸や砂浜では水に直接触れることができ、この付近は、京急富岡駅等へ行くためや、舟溜りに面して

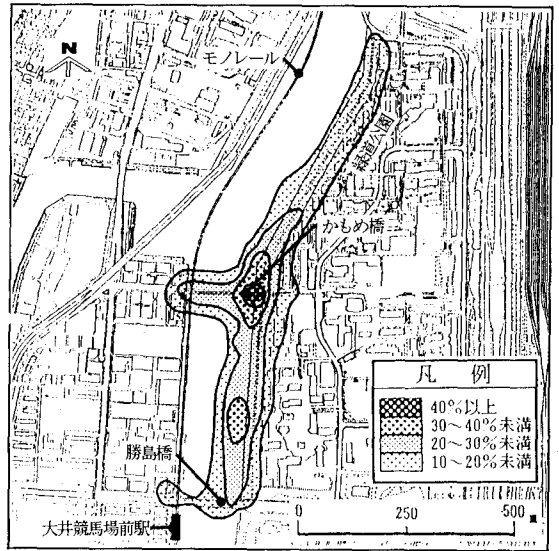


図-8 『八潮』の住民が最も頻繁に利用する水辺

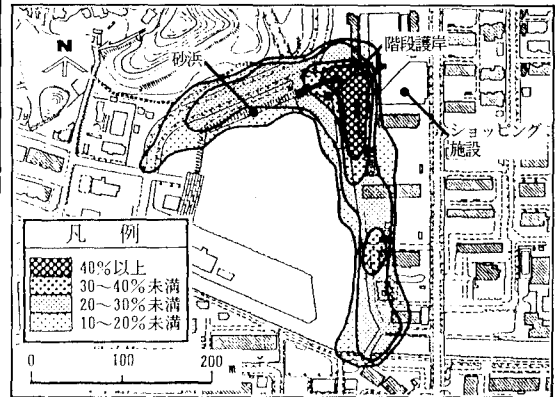


図-9 『金沢』の住民が最も頻繁に利用する水辺

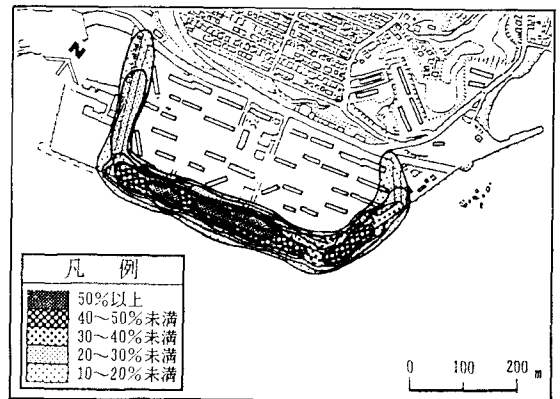


図-10 『浦賀』の住民が最も頻繁に利用する水辺

立地するショッピング施設への通路として多くの住民に利用されている場所でもある。

『浦賀』(図-10)は、敷地中央の護岸部分は指摘率が50%以上と高く、そこを中心として両側に向け

で低くなっている。理由(表-5)をみると「余暇利用」が60.7%と顕著に高くなっているが、この水辺は、多くの釣人でにぎわう場所である。

これら3地区の利用する水辺の指摘率分布と、前述した身近に感じる水域の指摘率分布とを比較すると、『八潮』と『金沢』は両者の場所に明らかに一致性がみられ、『浦賀』は利用する水辺として指摘率の高い場所に身近に感じる水域が位置していることから、通勤・通学、買物、余暇といった目的による日常的な水辺の利用が水域の認知に深く影響する要因となっていることが把握できた。

表-5 最も頻繁に利用する水辺を指摘した理由 [単位:人、(%)]

八潮/パークタウン	金沢シーサイドタウン	浦賀かもめ団地
近いから 28 (34.1)	通過のため 36 (37.1)	余暇利用 51 (60.7)
通過のため 23 (28.0)	余暇利用 36 (37.1)	近いから 13 (15.5)
余暇利用 16 (19.5)	買物のため 25 (25.8)	景色がよいから 6 (7.1)
整備されている 8 (9.8)	整備されている 8 (8.2)	人がいるから 4 (4.8)
買物のため 7 (8.5)	水辺の状況が良い 8 (8.2)	広々しているから 4 (4.8)
自然を感じる 7 (8.5)	気分転換できる 5 (5.2)	通過のため 3 (3.6)
気分転換できる 4 (4.9)	近いから 4 (4.1)	自然を感じる 2 (2.4)
景色がよいから 3 (3.7)	自然を感じる 4 (4.1)	整備されている 2 (2.4)
水辺の状況が良い 2 (2.4)	景色がよいから 3 (3.1)	水辺の状況が良い 2 (2.4)
人がいるから 2 (2.4)	人がいるから 2 (2.1)	買物のため 1 (1.2)
広々しているから 0 (0.0)	広々しているから 0 (0.0)	気分転換できる 0 (0.0)
その他 2 (2.4)	その他 0 (0.0)	その他 3 (3.6)
特になし 8 (9.8)	特になし 0 (0.0)	特になし 9 (10.7)
有効回答者数 82 (100.0)	有効回答者数 97 (100.0)	有効回答者数 84 (100.0)

(6) 認知する水域と好ましい景観との関係

図-11,12は、『八潮』と『金沢』で被験者が好ましいと感じる水辺の景観として範囲づけた指摘率分布を表したものである。なお、『浦賀』は被験者のほぼ全員が口頭で対岸の房総半島方向を指摘しているため指摘率としての図化は行っていない。また、表-6は、好ましく感じさせる要素を回答数の多い順に示したものである。

『八潮』(図-11)では、かもめ橋が40%以上の高値を示しており、そこを中心として30%以上の範囲が鮫州橋のある入江の方向に延びている。好ましい景観の要素(表-6)をみると、「橋」が28.6%で最も高く、「水・水面・運河」(24.2%)が続いている。また、「緑・木々・花」とともに「首都高速・モノレール」が23.1%と比較的高い回答になっている。

『金沢』(図-12)は、水域北側に位置する富岡八幡宮のある小山一帯が指摘されている。ここは樹木が生い茂り一部は芝生の公園としても整備されている場所であることから、好ましい景観要素(表-6)には「緑・木々・芝生」(61.9%)が最も多く指摘され、「水・海」(30.9%)、「山」(25.8%)が続いている。

『浦賀』の好ましい景観要素(表-6)は、「千葉・

房総半島」(46.6%)や具体的に「鋸山」(39.8%)を挙げる人が多く、東京湾を走る「船」(33.0%)も指摘されている。

これらの好ましい景観の指摘率分布と、前述した身近に感じる水域の指摘率分布とを比較すると、『八潮』では、どちらもかもめ橋付近に指摘率が高

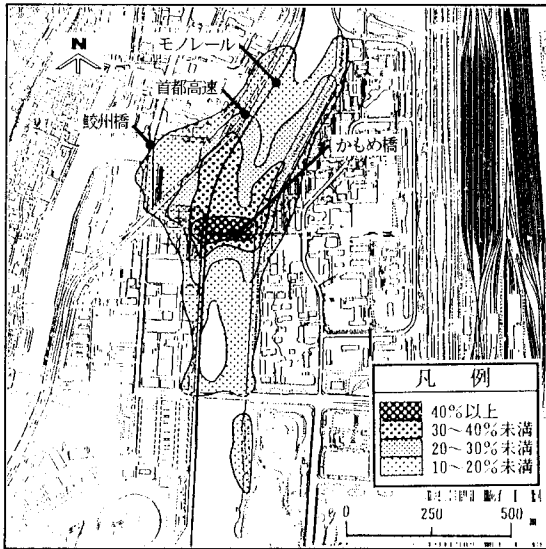


図-11 『八潮』の住民が好ましいと感じる水辺景観

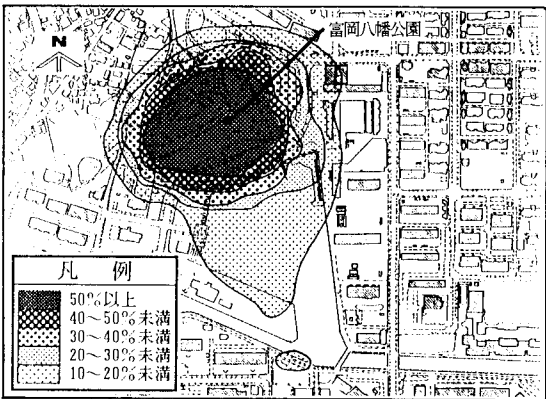


図-12 『金沢』の住民が好ましいと感じる水辺景観

表-6 好ましい景観と感じさせる要素 [単位:人、(%)]

八潮/パークタウン	金沢シーサイドタウン	浦賀かもめ団地
橋 26 (28.6)	緑・木々・芝生 60 (61.9)	千葉・房総半島 41 (46.6)
水・水面・運河 22 (24.2)	水・海 30 (30.9)	鋸山 35 (39.8)
緑・木々・花 21 (23.1)	山 25 (25.8)	船 29 (33.0)
首都高速・モノレール 21 (23.1)	夕日 14 (14.4)	対岸の夜景 13 (14.8)
船・やがた舟 14 (15.4)	建物 8 (8.2)	東京湾観音 9 (10.2)
富士山 10 (11.0)	自然 6 (6.2)	全体 8 (9.1)
公園・散歩道 9 (9.9)	空の広がり 4 (4.1)	首切り橋 5 (5.7)
空の広がり 9 (9.9)	昔の海岸線 3 (3.1)	水平線 2 (2.3)
夕日 5 (5.5)	水辺 3 (3.1)	鳥 2 (2.3)
夜景 5 (5.5)	船 3 (3.1)	その他 4 (4.5)
看板・ネオン 5 (5.5)	空 3 (3.1)	
水辺・岩場 4 (4.4)	公園 2 (2.1)	
団地・ベントウズ 3 (3.3)	全体 2 (2.1)	
野鳥・魚 2 (2.2)	その他 2 (2.1)	
その他 8 (8.8)		
有効回答者数 91 (100.0)	有効回答者数 97 (100.0)	有効回答者数 88 (100.0)

く、両者に一致性がみられるものの、『金沢』と『浦賀』は異なっている。このことより、住民は好ましい景観を形成している水域そのものを身近な水域と捉えているのではなく、好ましい景観対象を見るとき視線方向の中間に位置する水域を身近に感じる水域として認知しているものと解釈できよう。

4. 結論

水域の規模・形態の異なる3ヵ所の水辺住宅地における比較を通じて得られた知見を整理すると次のようにまとめられる。

①住民は、住宅地の前面に広がる水域に対して、全域を一様に認知しているのではなく、共通して意識の高い場所と、逆にほとんど意識されない場所が存在する。

②水域の規模が小さいほど、住民が認知する水域の一致性が高い傾向にある。

③水辺におけるさまざまな日常的な利用が住民の水域認知に大きな役割を果たしている。

④住民は、好ましい水辺景観を形成している水域それ自体を身近な水域として認知しているのではなく、好ましい水辺景観を見る視線方向に含まれる水域を身近なものとして認知していることから、好ましい景観対象が住民の水域認知を誘発する要因として寄与している。

5. おわりに

本稿で取り上げた『八潮』、『金沢』、『浦賀』をはじめとする水辺住宅地に居住する住民のほとんどは、これまで水辺に居住した経験もなく、当然ながら水を生活の糧とはしていない人々であると思われる。水は居住環境を高める装置として確かに有効ではあるが、水との煩わしい付き合いを避けて通れば、水ほど正直にそれを反映してしまうものもない。したがって、住民が長期に渡って定住できるようなコミュニティを形成するには、彼等に水に対する共通の価値観を植付けなければならない。このことは同時に、衰退・崩壊したと言われて久しい地縁を軸とした都市コミュニティを再生する一つの方法ともなる。水量や水流など、本研究では論及できなかった水域の個性等に関して研究が進められ、水辺住宅地に居住する住民にとって、共通の価値観の形成に

寄与する水域のあり方が究明されることが望まれる。

最後に、本研究を進めるにあたりご助言をいただいた中村和弘（住宅・都市整備公団）ならびに現地調査、資料作成等にご協力いただいた卒研生の稲葉正人（㈱電通国際情報サービス）、大塚義則（北野建設㈱）諸氏に感謝の意を表する。

引用・参考文献

- 1) 横内憲久，桜井慎一，橋本樹宜，富岡量秀：ウォーターフロント・コミュニティ形成に関する研究－（その6）金沢シーサイドタウンにおける水空間に対する住民意識の把握－，日本沿岸域会議研究討論会講演概要集No.2，pp.61～62，1989.5
- 2) 横内憲久，桜井慎一，橋本樹宜，富岡量秀ほか2名：ウォーターフロント・コミュニティ形成に関する研究－（その7）愛着感に影響を及ぼす要因相互の関連性について－，日本建築学会大会学術講演梗概集A，No.10005，pp.1085～1086
- 3) 篠原修，樋口忠彦：自然地形と景観，土木学会第26回年次学術講演会講演集 第4部，pp.193～196，1971.10
- 4) 松浦茂樹，島谷幸宏：都市の河川イメージの評価と河川環境整備計画，土木計画学・論文集No.4，pp.205～212，1986.10
- 5) 島谷幸宏ほか3名：河川景観における適度な水面の見えに関する研究，土木学会第43回年次学術講演会講演集 第4部，pp.310～311，1988.10
- 6) 斎藤潮：港の景観計画の考え方，港湾，Vol.61，No.10，pp.25～32，日本港湾協会，1984.10
- 7) 栗田治，腰塚武志，野本伸一：水面の可視性と水辺への到達距離に関する数理モデル，日本オペレーションズ・リサーチ学会1990年度春季研究発表会アブストラクト集，pp.182～183，1990.5
- 8) 北村眞一：空間認知の解析手法の有効性，都市計画 138号，pp.46～56，1985.12
- 9) 土肥博至：意識をとらえる[認知マップ調査]，日本建築学会編，建築・都市計画のための調査・分析方法，pp.75～80，井上書院，1987.4
- 10) 桜井慎一，横内憲久，鈴木洋，矢川隆史：住民が認知する港湾の領域に関する研究－船橋市を事例として－，第24回日本都市計画学会学術研究論文集，pp.367～372，1989.11
- 11) 辻新六，有馬昌宏：アンケート調査の方法－実践ノウハウとパソコン支援－，p.123，朝倉書店，1987.11